

# 新潟平野北部の遺跡分布と埋積状況から見た旧地形

岡本郁栄\*

都市や集落の立地は、その時代の政治・経済あるいは宗教に影響され、さらに自然環境を反映する。この立地条件は古い時代ほど自然的要素が大きく、分布調査・発掘調査を通して、地形の変化や気候を含む遺跡周辺的环境変遷をたどることも可能である。

旧石器時代 遺跡はすべて丘陵山麓に立地し、沖積面には分布しない。特に、阿賀野川右岸の笹神丘陵と背後の地溝帯に集中する。

縄文時代 旧石器時代に続き笹神丘陵地域に多く分布するほか、新津丘陵一帯と砂丘に分布域が広がる。旧石器時代と縄文時代は、基本的に同じ生産活動に依存することから、遺跡数の増加は人口増加と背後の生産力向上を示し、砂丘上の遺跡は新たに砂丘が形成されたことを示す。沖積地に存在する遺跡は、縄文時代後・晩期の遺跡が多く、縄文時代後半から末期にかけて海退と海退に伴う沖積面の拡大が生じたことを示唆する。

弥生時代 稲作に生産活動の基礎を置くが、縄文時代と同じ分布傾向を示す。遺跡数減少の理由として沖積面下埋没（未発見）説、縄文時代後期から続く環境悪化による人口減少説などがある。丘陵尾根に立地する遺跡は、防衛など生産活動以外の要因による。阿賀野川下流に分布する遺跡は、新しい砂丘列が平野の前面に形成されたことを示す。

古墳時代 遺跡が丘陵から離れる傾向が強まる。生産活動がより稲作に重きを置くようになり、かつ沖積地における生活が安定したことを示す。北蒲原の胎内川左岸では、沖積面上に古墳が造営され、遺跡も一挙に増加する。この時期の遺跡は特定地域に集中的に出現することが多く、背景に入植活動が想定される。

古代（奈良・平安時代） 遺跡数が飛躍的に増加し、生産力が向上かつ安定したことを示す。平野には一般的な集落が立地し、丘陵地域に須恵窯・製鉄遺跡、海岸に製塩遺跡が分布する。須恵窯と製鉄遺跡が集中する地域には、官衙等の特別な目的・地位を持つ遺跡が存在することが多い。阿賀野川右岸、早出川右岸の遺跡空白域は両河川の旧流路あるいは氾濫原を示す。

中世（鎌倉・南北朝・室町時代） 古代と同じ分布傾向を示すが、古代に比べ阿賀野川右岸の氾濫原が狭くなり、阿賀野川の河道は現在に近づく。新津丘陵北部と能代川流域では遺跡数が減少あるいは激減する。五泉・村松地域は、遺跡が現村松町北東部に集中し、能代川流域の水田利用が現在の姿に近づいたと考えられる。

---

\*（株）吉田建設

図 1

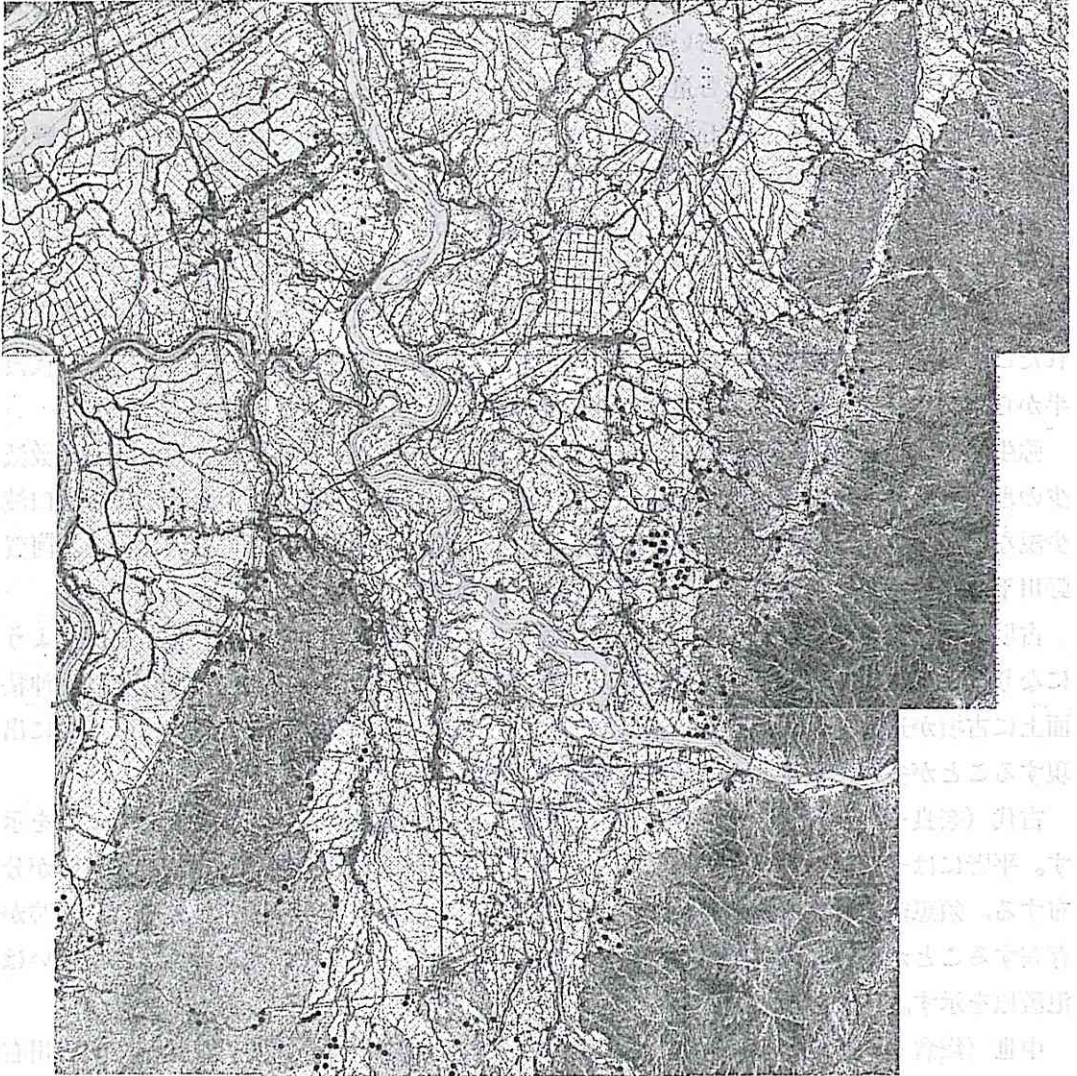


図-1  
旧石器時代・縄文時代の遺跡分布図  
旧石器時代：●

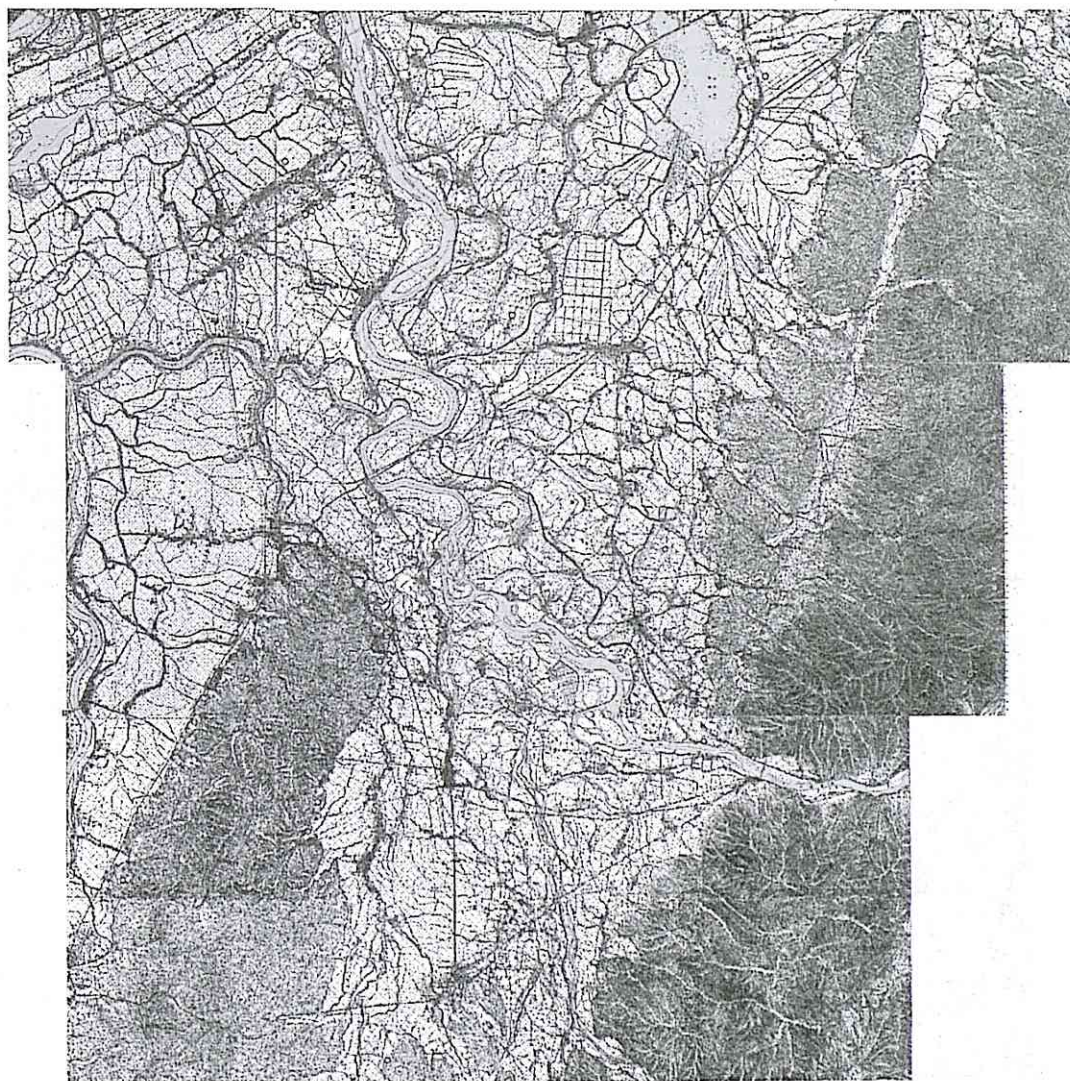


図-2  
弥生時代の遺跡分布図



図-3  
古墳時代の遺跡分布図

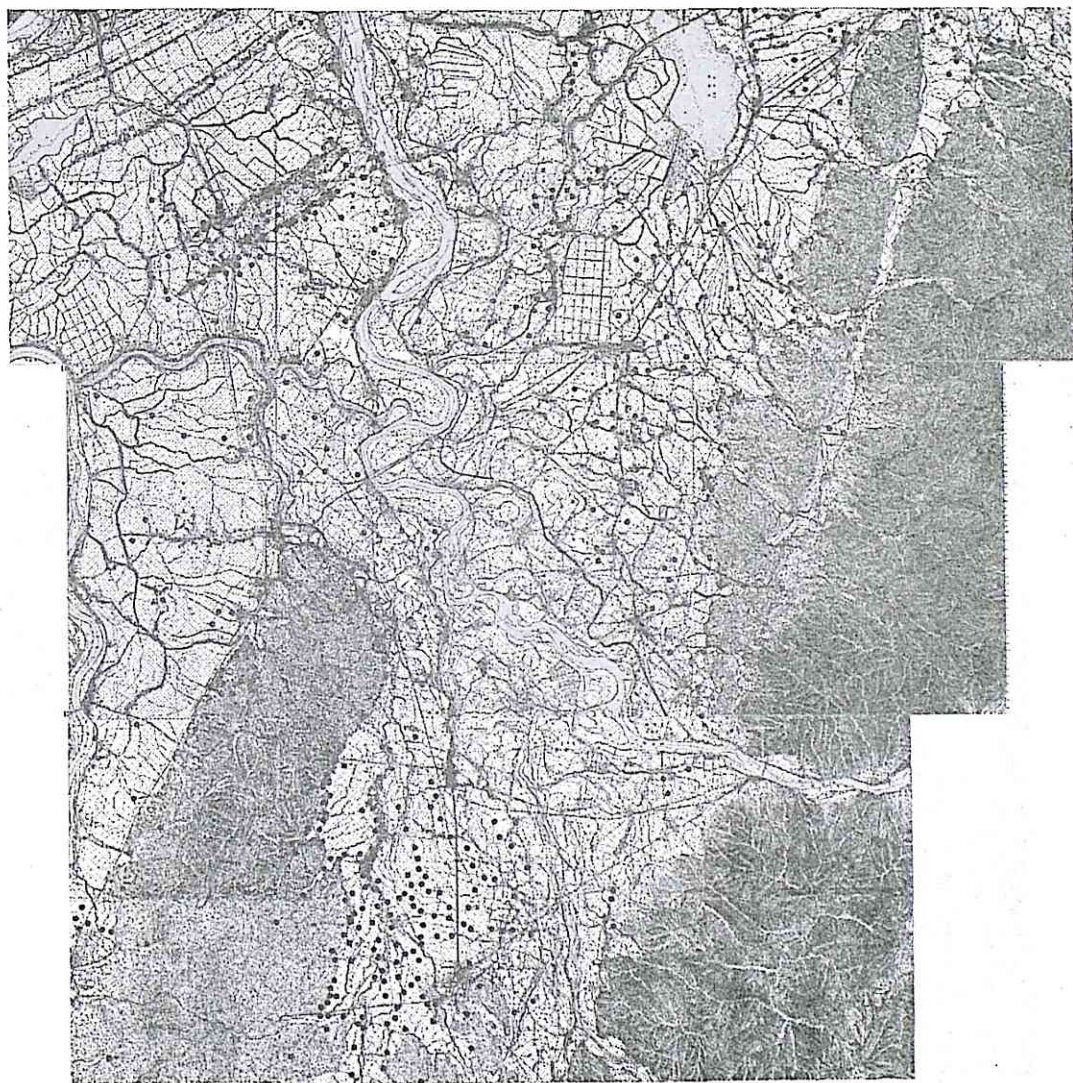


図-4  
古代（奈良・平安）の遺跡分布図  
須恵器窯・製鉄遺跡：◎



図-5  
中世（鎌倉・室町）の遺跡分布図  
窯・製鉄遺跡：◎